International MRA Association of Japan

IMAJ

NEWS NO.94

（社）国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　2000年11月9日
発行所　（社）国際MRA日本協会
150-0022 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5
東光苑マンション802
TEL:03-5721-6861 FAX:03-5724-6880
E-mail: LEB03055@nifty.ne.jp
発行人　相馬　雪香
編集人　長野　清志
頒　価　1部200円

Nov. 2000

第54回コーMRA世界大会レポート

『個人からグローバルな社会へ』

今夏コーでは次の6つの会議が開催されました。

7月8日（土）～16日（日）	東西ヨーロッパにおける自由への基盤
7月17日（月）～23日（日）	21世紀のための目的と価値観を探る
7月25日（火）～30日（日）	コー産業人会議 ビジネスと産業―パートナーシップの核心
7月31日（月）～8月7日（月）	変革をもたらすための触媒としての芸術
8月8日（火）～12日（土）	互いの人生と信仰を分かち合うために
8月31日（日）～20日（日）	和解への課題―過去を癒し、未来を築く

●コー・マウンテンハウスでの対話

また、これら会議の他に、本年も世界各国からの19名の大学院生等を対象に、紛争解決の理論と技術を学ぶ『コー・スカラーズ・プログラム』が、メディア関係者による『国際コミュニケーション・フォーラム』、更には、『政治関係者による円卓会議』も開催されました。

日本からは、西沢辰也さんが『互いの人生と信仰を分かち合うために』の会議に、羽田孜衆議院議員ご夫妻、谷川和穂衆議院議員、伊藤英成衆議院議員ご夫妻を初め16名が『和解への課題―過去を癒し、未来を築く』の会議に参加されるなど総勢18名が参加しました。

アフリカ系アメリカ人の牧師が、大会議場の壇上から自分の家族の問題を率直に話しながら、『コーは安心して本音が話せるところ』といわれましたが、レバノンで内戦に関わったキリスト教徒とイスラム教徒の相互の深い謝罪が行われるなど、今夏もコーでは多くの和解がもたらされました。又、アラブとパレスチナ、そしてイスラエルからの人々の心を開いた話し合いも行われました。アジアからは本年も中国の国際交流協会の代表や金太智元駐日大使を初め韓国からの代表も参加し、北東アジアの最近の大きな動きが報告されました。

日本からの参加者を代表して3名の方々に、コーで感じられたこと、学ばれたことなどをご報告頂きました。

■主な内容■

◆第54回コー世界大会レポート・1－3
◆MRA月例会に参加して・4
◆第15回コー円卓会議レポート・5
◆21世紀に向けて・6
◆母親心理学訓練講座から・6
◆ジンバブエとMRA・7
◆コラム『甘口・辛口』・8
◆事務局便り他・8

「政治家円卓会議」から「政治円卓会議」へ

スイスのコーMRA世界大会に出席して

MRA推進議員連盟副会長　谷川　和穂

MRAコー世界大会で政治家による円卓会議がはじまったのは鳩山由紀夫議員の提案にスイスの議員団が賛同した三年ほど前でした。この二年間は毎年八月、日本では国会があって、今回相馬雪香さんやMRAの皆さんと、久々に現・前の国会議員と一人の地方議員がコーの世界大会に参加しました。MRA推進議員連盟ではコーの大会前、日程上残念ながらコーまで行けない超党派の議員が加わって、マーキン・ボスニア大使からボスニア・ヘルツェゴビナで起こった殺し合いの凄じさ、外務省の北東アジア課長からは朝鮮半島で動き出した「和解」の実態、ジュビリー2000日本代表の北沢洋子さんからは沖縄サミットでの重債務最貧国問題についてのご報告を伺ったのですが、出席した四人は夫々の場所で夫々発言をして参りました。集まった人々の口から直接『殺し合い』の凄じさを、そして感動的な和解の姿を目のあたりにして、二十世紀とはなんと凄じい世紀であったか、二十一世紀にむけてわれわれは希望を捨ててはならないと改めて感じ入ったしだいです。コーでは、地球上でこの十年間に五百萬人が内戦で命を落とし、六百萬人が傷つき、四十年前三十対一だったリッチとプアーの比率は今や七十五対一、オイルショック以来IMFや世銀から返還を求められた重債務最貧国の借金を先進国が棒引きにできれば十五億人が飢餓から救われる、サミットでの約束を果たせ、使わないものまで生産することを止めにするのはIT革命で可能な筈だ、ムダを省き、必要以上のものは殺さないという二十一世紀を目指すべきだ、といった話が、あっちのテーブルでもこっちでも盛んに行われておりました。

ヨーロッパの若者の間で特に東西問題や南北問題についての発言が多かったのは冷戦時代の「分裂」と「対立」の時代から世界史上始めてのヨーロッパ統一の時代に入ったからでしょうか？　国境を越えたグローバリズムが実現して、『癒し』とか『和解』がますます現実的な問題となってきたということなのでしょう。

「政治家円卓会議」は出席者全員の同意で「政治円卓会議」（ポリテイカル・ラウンド・テーブル）と名前を変えることとなりましたが、MRAがどんどんNGOとしての働きをしているのは驚きでした。

●真摯な話し合いがなされた政治円卓会議

コー世界大会に参加して

●クロアチア、アルゼンチンの青年と（中央が森山さん）

堺市議会議員　森山　浩行

「日本にはすべてがあるが、希望がない」
現在、私の日本社会への危機感はこの点に集約されます。物質的に満足な生活が保証された中での相次ぐ政治や企業の不祥事や経済至上主義はとりわけ若い世代から目標を奪いました。私は「明日が今日よりよくなる確信」や「自分が地球や未来に負うべき責任」を自覚するカギをさがしにコーの会議に参加しました。

29歳の私は普段「最年少」議員として活動していますが、コーではたくさんのヤングリーダーに会うことができました。次期選挙で国会議員に立候補するジャマイカの28歳の青年や、22歳にしてすでに大学院を卒業し、MRAの国連大使として国連本部につめている

アメリカ人と話をしていると、「飛び級」を含め、やる気のある若い才能を育てる土壌の違いを感じました。

また、国際会議自体にはそれほど執着せず、スポーツやキャンプファイヤーなどをしよう！とよびかけるハイティーンの若者たちは自然に工夫して「参画」してゆく方法を知っているように見えました。

食事の準備から掃除、会議の運営にいたるまでコーの会議全体が「参加ではなく参画」してゆくという気概に満ちていることに感動をおぼえました。また途上国や紛争当事国からの参加者の交通費が個人の寄付でまかなわれるなど、ＮＧＯ活動の精神が深く浸透してこの会議が開催されていることに気づきました。

政治家円卓会議にも出席させていただき、紛争や闘争の中で平和と安定を模索してきた世界の政治家の経験を聴くことができ、多いに刺激を受けました。

今回の会議に参加してまず個人としては心を開いて討論することの大切さ、指示を受けるのではなく自分責任で参画することを心で感じることが出来ました。これらはアタマではわかっていたことで、教育や役所の体質や社会構造などの問題点として常に指摘し、改革を訴えている点ですが、自分も「日本の問題」の影響を受けて生きてきたのだなあ、と思い知らされた10日間でした。そしてもうひとつ、大きな目標としてもらったのは地球と未来のために「世界平和」を構築すること、それも念仏のように平和をとなえるのではなく、確実に行動しながらネットワークを大切にしてゆくことです。特に日本人として私は和解のすんでいない近隣諸国との関係をしっかり構築しなければならないと感じています。

父母や祖父母の世代の方々のおかげで物質的にはこの上ないレベルを享受している私達の世代は地球全体の未来の為にピースメーカーになるのだ、という希望をいただいて帰ってきました。

日々この気持ちを忘れることなく、活動してゆきたいと思います。

●「責任のグローバル化なしに経済のグローバル化は考えられない。モラルの精神に則った将来への大きな希望を育てるために　個々人として何をすべきかを考えよう」と呼び掛けるMRAスイス・コー財団のソマルガ理事長（前国際赤十字総裁）

●和解の秘訣を寸劇に仕立てたコー・スカラーズの参加者たち

◇◇コーで学んだこと◇◇

藤田　愛（中学３年生）

今回のコーで、旧ユーゴスラビアの民族紛争に関するミーティングに出席し、２人の若い人の話が心に残りました。一人は、ティハ（18歳）という女の子でクロアチア人とセルビア人のハーフですが、両親は戦争が始まると離婚し、母方の祖父母に育てられました。戦争が激しくなるにつれ、クロアチア人からもセルビア人からも認められず、いじめと差別を受けたため、心に大きな憎しみが生まれました。そんな時、祖父母の友人の紹介でコーに来ました。コーでは色々な人種や異宗教の人たちがたくさんいて、初めは驚きましたが、お互いの国の平和と発展のために話し合い、助け合いながら生活する中で、心の中の寂しさや怒りがすこしずつ癒されていったそうです。そして、‘神様から命を授かった同じ人間であり地球上に存在する仲間なのになぜ争うのか’と自分の国の戦争に大きな疑問を持ち始めました。平和のために自分でできることは何かという問題に一生向きあっていこうと決心したそうです。

次は、セルビア人の青年ダルコ（17歳）です。彼は両親と親戚の大家族で暮らしていましたが、戦争が激しくなるにつれ、男の人たちは戦争にかり出されていき、残った家族の何人かもクロアチア人に殺され、とうとう母親とイギリスに亡命しました。住む所も、お金も、働く所もなく生活はどん底でした。母親は資格を取るため学校へ行きながら必死に働いたそうです。彼も子どもでも働けるところを探して、何でもしたそうです。彼は、将来たくさんの人を助けるため医者になるという夢をもっていますが、今も学校に通いながら、週に80時間働いているそうです。恩師の紹介と援助を受けてコーに来ましたが、人間同士で争うことなく、お互い助け合う平和な国を作るため、自分たち若者たちがかけ橋になっていこうと決心したそうです。

彼等は自分と１～２歳しか違わないにもかかわらず、自分の国に誇りをもち、真剣に自分の国のことを考えているのです。私は、平和な国に育ったにもかかわらず、自分の国に誇りをもてずにいました。しかし、自分でも何かできることを探し、自分にも、そして、自分の国にも誇りをもてるようになりたいと感じました。そして、平和な国、日本が、他の国を平和にしてあげられるようになりたいと思います。友人と、自分たちでできるボランティア活動をしていくことにしました。今までは、友人にこのような話をしても、いい子ぶってと相手にされませんでしたが、それを恐れることなく仲間作りをしていきたいと思います。

コー世界大会の報告会が去る、9月7日（木）、学習院創立百周年記念会館の会議室で開催され、羽田孜、谷川和穂、伊藤英成各議員を初めとした方々から、コーで感じ、又、考えられたことをご報告頂きましたが。その月例会に初めて参加された山口俊子様が次のような感想を寄せて下さいましたのでご紹介させて頂きます。

今回初めてMRAの9月例会に参加させていただきましたが、当日、資料を頂いてパッと目に飛び込んできたのが「個人からグローバルな社会へ」という言葉でした。そしてスイス・コーの大会に出席された方々の報告をうかがいながら、MRAが世界の平和のために地道な努力を続けていることが少しずつ分かってきました。ああ皆さんの目は表題のごとく広く世界に向かっているのだな、これはすごい集まりなんだなというのが私の率直な感想でした。

日本で、東京で、職場で、家庭で、一個人として平々凡々とした日々を送っている、狭い視野の中で生活をしている私は一体なにをしているのだろうと深い反省を迫られたひと時でもありました。相馬雪香先生の平和ボケしている日本の若者たちへの厳しい凛としたお言葉を、わが身への言葉としても受け止めたのでした。

私自身昭和16年という太平洋戦争勃発の年に生まれていながらその戦争体験は、東京大空襲の時の空が真っ赤だったこと、それを美しいと眺めていた程度の記憶しかなく、戦争というものを、悲惨なもの、怖いものとしての実感として捉えていない、そんな年代です。島国の平和ボケしたなかで60年近く生きてくると、他国での国家間の闘争、民族間の対立、お隣の朝鮮半島のように一国内での分裂紛争など、絶えることのない争いや、そのために苦しみを強いられる一般市民の生活などが毎日のように報道されるのを見ていても、胸を痛めこそすれ、なかなか我が事として受け止めにくいのが現実です。

そんな私ですがずっと関心を持ち、気にかけている国があります。1987年のこと、ユーゴスラビア日本文化週間というイベントに参加し、ユーゴの街並みや自然の美しさに魅せられ、ユーゴフアンになって帰国しました。それだけにその後に起きたユーゴをめぐる数々の内紛や外国の軍事介入などで次々破壊されていく歴史的にも貴重な美しい家並みをテレビの画面で見せられた時の驚きと悲しみはとても言葉では言い表せませんでした。当時から言語、文化、宗教の違う7つの民族の連合国家という複雑さゆえの問題を抱えているとは聞いていましたが、民族間で憎しみあった時に、これほどまでにお互いが傷つけ合い、破壊しあい、苦しみ合わねばならないのか、どうして？と思わずにいられませんでした。今なお続くユーゴの抗争は、お互いに理解し合うこと、歩み寄ることのむつかしさを私に突きつけています。あの心優しかったユーゴの人たちを苦しみから早く救ってあげて欲しい。それが私の願い、でも私個人でいくら思い悩んでもなにも出来ない、そう思っていました。でも今回MRAの会に出席してみて、ああこの団体のような組織が、私心のない援助、和解をさせるための道を探ってくれているのだなと思い、急に身近なものに感じられたのでした。大げさに言えば、私という個のなかでの苦しみが、グローバルなものへと向いたことで、希望が湧いたということでしょうか。

そうは言っても具体的に私に何ができるわけではありません。していることと言えば、仕事の合間にこつこつと地を這うようにして、地域でぼちぼちボランテイア活動したり、日本や外国で活動しているNGOやユネスコなどに少しばかり協力しているくらいなものです。でも今回何とない希望を持ったことで、私が一番共鳴したこと「戦争という形をとらず、和解への道を探りつづける」MRAの活動に、何らかの形で協力、応援させていただけたら、私自身がもう少し大きな目を持てるかもしれないと思ったのでした。

最後に中学生の藤田さんの報告をとても嬉しく聞かせていただきました。この年頃に心に刻まれたことは、その後のお嬢さんの人生に大きな影響を与えると思います。私の娘も20年も前ですが、中学時代にアメリカに1ヶ月滞在し、そのときあちらの人々の日本に対する認識の余りにかけ離れていることに驚き、大人になったら日本の文化を正しく伝える仕事をしたいと決心したようです。数年前からその夢がかない、外国の方々に日本語と日本文化を伝える仕事についています。そしてこの11月から韓国に渡ってあちらで同じ仕事をすることになりました。日韓の過去の不幸な歴史を踏まえた上でこの道を選び、また北と南の交流が始まろうとしてる韓国の今の時代に身をおいてみたいのだそうです。いま、わだかまりを捨てた若い人たちを中心に、北と南、また日本との関係も大きく変わろうとしているのを肌で感じます。そんな娘を気持ちよく送り出し、応援してやることも私にとっての一つ大きな前進と受け止めています。

山口　俊子

●月例会でコーで学んだことを報告する藤田愛さん
（後ろは左から羽田孜衆議院議員、谷川和穂衆議院議員）

第15回コー円卓会議

『グローバル時代における節義あるビジネス・リーダーへの課題』

須田　康司　コー円卓会議（ＣＲＴ会議）日本部会コーディネーター

今年度のコー円卓会議・産業人会議（ＣＲＴ会議）が９月７日～９日にシンガポールにて開催され、私はＣＲＴ部会の事務局として、また同会議のスタッフとして初めて参加致しました。今回ＣＲＴ会議はその歴史の中で初めてスイスのコーを離れてシンガポールで開催された訳ですが、参加者の熱気と真摯な討議姿勢は従来と何ら変るところはなかったものと思っています。

会場となったのはシンガポールでも一流のシャングリラ・ホテルで、さすがに会議施設は申し分のないものでした。このホテルは会議参加者の宿泊場所でもあったわけですが、宿泊施設としても立派でありました。

さて、会議への参加者数はグローバルＣＲＴのウォーリン会長以下ＣＲＴグローバル・ステアリング・コミティー・メンバーを含む各国の企業トップを中心に、世界銀行等の国際機関や学界の方々を交えた31名に加え、ゲストやオブザーバー11名の合計42名でした。この他に、参加者の奥様方や我々スタッフも加えると総勢60名強を数えました。日本からは木内孝氏（元三菱電機常務）、奥田卓広氏（近畿日本鉄道取締役）、宮城孝太郎氏（キヤノン香港／キヤノン・シンガポール社長）、そしてCRT-J部会長の小笠原敏晶氏（ジャパンタイムズ会長／ニフコ社長）、同副部会長の[illegible]子尚志氏（NEC相談役）、同幹事の金子保久氏（科学技術財団事務局長）の６名が参加されました。

２日間の会議は「グローバル時代における節義あるビジネス・リーダーへの課題」を全体テーマに据え、５つのセッションを設けてそれぞれのテーマについてプレゼンテーションとディスカッションを行いました。セッションのテーマとしては、例えば「WTOシアトル閣僚会合及びその後の論争に見る世界貿易の課題」、「節義あるビジネス・リーダーシップの実践」或いは「ＣＲＴ・企業の行動指針の実践」等々が取り上げられました。世界の４分の３を占める貧しい地域に住む人々の救済、地球上の誰もが豊かに暮らす為の方策、等々の大変大きな課題に対して、世界のビジネス・リーダーとして何が出来るのか、という観点から誠に真剣且つ活発な議論がなされ、大変に感動しました。

今回はアジアでの開催ということで、日本を除くアジア地域からシンガポールを中心に13名が参加しました。ただ、韓国からの参加者がお一人だけであったのが残念でした。

今回の開催に当たっては、地元のシンガポールの受入準備にあたられた方々の大変なご努力のお陰で、テーマ・パーク「ナイト・サファリ」でのディナーや園内ツアー等のエンターテインメントの面も充実したものであり、全体として大いに成功であったものと思っています。

次回の会議は2001年９月にイギリスのロンドンで開催されることが決定されましたが、コー円卓会議の開催場所に関して「諸般の事情があって今回はシンガポール、また次回はロンドンでの開催となったが、コー円卓会議のオリジンはスイスのコーであることを我々は忘れてはならない。いづれコーに戻ることを是非考えて欲しい」とのグローバルＣＲＴのウォーリン会長からのコメントが大変に印象に残っています。

●熱心な話し合いがなされた会議の様子

●環境問題のテーマで講演中の木内孝氏（フューチャー500・会長、元三菱電機常務）

『21世紀に向けて』

民主党特別代表　羽田　孜

今夏、2000年スイス・コーMRA「和解の課題」政治円卓会議に参加し、世界の多くの方々と話し合う機会を3年ぶりに得ました。

その後、カザフスタン、ウズベキスタンの両国を訪ねました。テロ問題がこの中央アジア地域の不安定要因でした。これらの指導者が、「われわれはアジアの一員である、日本が国際社会でもっと積極的に発言し、行動して欲しい。われわれは日本のイニシャチブを全て支持します」と語り、期待が寄せられていたことが特に印象的でした。テロという卑劣な手段の前に、なぜ話し合いができないのかということと、日本が国際場裏でもっと平和創造に多くの役割を果たす必要があることを痛感しました。

帰国後、翌々日、北方領土を訪問しました。長い間住み、開拓した海路、漁場を追われた旧島民の方々と、国後、色丹の二島を訪ね、現在住んでいるロシア人とお祭りや運動会などで交流を深めました。領土問題は未解決でも、隣の住民との間では話し合いも交流もでき、返還された後の和解と共生の道は可能だと実感しました。

一昨年11月に「20世紀最後のアジアの独立国」東チモールを訪問し、独立指導者グスマン氏、ノーベル平和賞受賞者のベロ司教と会談したほか、インドネシアのメガワテイ大統領代行とも会談しましたが、住民の平和と独立への強い意思を身をもって受け止めてきました。9月に来日したベロ司教の話に厳しい現状も知らされ、われわれも更に努めなければと強く思いました。さらに、6月には、戦後半世紀、分断と対立を続けてきた南北朝鮮が首脳会談を実現させ、民族の悲願である平和統一へと対話をはじめたことは最大の和解といえます。

私は21世紀を「平和と安定の世紀」にしていかねばと思います。そのために、アジアの平和と安定と繁栄は欠かすことができません。人種、宗教、国境、イデオロギーを超えて、話し合い、相互理解、和解、共生が地球規模で進められることが重要になっています。長い歴史と多くの足跡を残してきたMRAの存在と役割がますます期待される時です。新しい世紀を迎えるにあたって、日本の人達がもっと世界に目をむけ、世界の人々との、友好と信頼を深め、行動することを期待し、私自身も更に努めたいと覚悟を新たにしています。

『自分が変わる、家庭が変わる』

—母親心理学訓練講座より—

今回も故山崎房一MRA協会理事が始められ、現在も高柳静江さんや他の方々により全国各地で子育てに悩まれている多くのお母さん方を助けるため開催されている母親心理学訓練講座を受講された方の体験をご紹介します。

『不登校をしていた6年生の娘が、目を見張る成長をしています。以前は、保健室登校をしていましたが、現在は、ほとんど教室で過ごし、友達とも自然に交流しています。学校の行事にも参加し、笑顔がとても明るくなりました。

先日、クラス別マラソン大会に、娘がアンカーとして選ばれたと聞き、驚きと不安で複雑な気持ちになりましたが、「実力がないとアンカーに選ばれないのよ。すごいね。頑張ってみようね。」と、言うことができました。かっての私だったら、「とんでもない。また、途中で投げ出して、まわりの人に迷惑をかけるのに」と言っていたところです。でも、今回は子供の先回りをせず、自分の気持ちを抑えて、後ろから見守ることができました。当日は、娘の心境を思って、物陰からレースを応援し、ただ、祈るだけでした。あとで、関係者から、娘が大変緊張してスタートしたことを聞き、娘が“不安と恐怖を乗り越えて、誰の助けもかりずに自分に打ち克って、一所懸命に走ったのだ。本当によくやった。すごい。”と感動しました。娘のチームは一等賞、そのうえ娘は、最優秀選手賞までいただきました。親の知らないところで、娘が自信をつけ、乗り越えていっている様子を見て、とても嬉しく思いました。

そして、今まで、私たちを見守ってくださった全ての人々と、娘に、心から感謝いたしました。その時、何事も効率よくこなすことが正しいと思いこんできた私の考えに気づき、人生に無駄なことは一つもない。全部必要な事という言葉が、また一つ胸に落ちました。』（高柳静江さんの発行されている『お母さんのネットワーク通信NO.21号』の中のHさんの報告より）

▼▼▼ ジンバブエとMRA ▼▼▼

〈MRAの貢献〉

イギリスの自治領であったローデシアは、1950年代にイアン・スミスをリーダーとして人種差別主義を主張するローデシア・フロントを形成し、65年には一方的独立宣言を行いました。その後、南アフリカと共にその厳しい人種隔離政策（アパルトヘイト）で知られたローデシアは、80年にロバート・ムガベ大統領をリーダーに戴くジンバブエとして独立を果たしましたが、平和裏に白人政権から黒人政権に移行するその課程で、MRAが大きな役割を果たしました。

イアン・スミス首相の息子、アレックはかっては父親に反抗するいわゆる「放蕩息子」であり、麻薬中毒でもありました。しかし、73年に心の変化を体験した彼は、麻薬を止めると共に、社会にも関心を持ち始めMRAの活動に参加するようになりました。彼は、自発的に黒人への謝罪も行うようになり、後には首相である父親と黒人のリーダーを引き合わせるという重要な役割を担うようになったのです。又、75年に首都ソルスベリーでMRA国際会議が開かれたのを初め、79年のスイス・コーの国際会議には白人、黒人を含めて17人が参加しました。この他に70年代を通して様々な非公式の場で、MRAは政府間レベルの交渉の背後でも独自の役割を果たしていました。（このMRAの果たした役割については、MRA事務局に詳しい資料がありますので、関心のある方はお問い合わせ下さい。）

〈現在のジンバブエの状況〉

1982年に起こった酷い旱魃の影響や、20年というあまりに長期にわたるムガベ政権の下で汚職等の腐敗が生じると共に、経済政策の誤りもあり、現在、経済不況と50%を越える高い失業率に悩まされています。又、土地の分配問題も重要課題です。未だに約4000人の農場主が豊かな農地の7割を所有しています。2月以来、「独立戦争の旧軍人」と称する人々が白人の農地1600ヶ所以上を不法に占拠し、農場主等多くの人々が殺されたのは日本でも報道された通りです。

そんな中で去る6月に行われた総選挙では、各地での様々な宗派の教会の働きかけにより、高い投票率を示したようです。又、地方の農業に従事する黒人の人々が白人（人口の1%）の立候補者に投票する姿が見られたということも将来への希望につながる要素でした。（選挙で選出された白人議員は野党の3名）

〈ジンバブエのMRAチームのコー世界大会参加〉

このような状況の中で、国のためにMRAとして何が出来るかを考えたいとジンバブエのMRAチームの人々が今夏のコーの世界大会への参加を希望しました。自分たちの集めた金額ではとうてい足りず、オーストラリアのMRAの専従者のジョン・ボンド氏より日本からも財政支援をとの依頼がありました。

そこで、日本のMRAの有志の方々に協力をお願いしたところ最終的に33口・34万8千円のご寄付が集まり、7名のジンバブエの方々がコーの会議に参加できるようになりました。日本からの寄付は彼らのコーでの滞在費に充てられ、又、オーストラリア（1.200ドル）、アメリカ（2.000ドル）、イギリス（3.750ドル）（計6.950ドル）からの寄付金は航空運賃に充てられました。日本のMRAが他の国々のMRAの人々とチームワークを取って、このようにジンバブエの将来のために役に立つことができたことは有り難いことです。（ご協力を賜った方々には、この紙面を借りまして改めて御礼を申し上げます。）

〈ジンバブエの現在のMRA活動〉

現在、MRAの活発な活動が再度求められている状況にもかかわらず、MRA自体も経済不況の影響をまぬがれず、その活動に大きな支障をきたしています。

MRAの賛同者によって1977年に寄贈されたグウェルにあるMRAクルモリーン農場の経営も厳しい状態にあると共に、所有していたミニバスも手放さなければならなくなり、各地のMRAのチームのメンバー同士で会うことさえも困難になっているそうです。（その意味でもコーでジンバブエの7名の方たちがお互いに国の将来についてじっくり話し合えたことを非常に喜こんでいました。）また、農場内に作られた研修及び会議施設で行っていた社会道徳教育プログラムを継続するために、故障したテレビやビデオデッキを買い換えたくても、それもままならない状況であるとのことです。

麻薬やエイズやアルコール中毒などの問題もあるが、今ならまだ間に合うので、若い人達にMRAの価値を知らせたい。そのためにも、今後は、特に将来の国の指導者となりうる、大学生を初めとした青年を対象とした教育プログラムを作って実施して行きたい、また、MRAのチームでもっと集まって共に働いて行けるようにしたいとの希望をもっています。

日本のMRAとしても、各国のMRAの人々と協力の上、今後ともジンバブエの国作りに役だっていければと思います。

以上

●「遠い日本の方たちからこの様に支援して頂いたことを心から感謝します」と、日本のMRAに記念品を頂く。（コー）

◇◇◇ コラム『甘口・辛口』◇◇◇

社団法人国際MRA日本協会会長　相馬　雪香

― MRAは地下水の如し ―

地下水はある時は深く、ある時は浅いところで、とうとうとして流れています。地表が固かったり、岩で蔽われていたり、コンクリートで固められている場合には、その存在も忘れられがちですが、それは生命の糧で、歴然として存在しております。

今回、(10/10～15)、中国国際交流協会（CAFIU）のお招きで東京のMRAのメンバー6人が北京を訪問致しました。中国国際交流協会とMRAのおつき合いは1980年代に始まっております。それ以来7～8回にわたりコーの世界会議に理事の方々がご出席され、スイス、イギリスのMRAの仲間も訪中しております。

今回の訪中はコーでの出会いに加えて、榊たか子さんの10数年にわたる誠心のおつきあいで築かれた友情のたまものでした。協会のご配慮で、協会の主だった方々との懇談をはじめ、中日友好協会、中華全国婦女聯合会、中日友好環境保護センター、北京育英学校、北海幼稚園等、道義を軸としているMRA精神と関係のある組織の方々とお話し合いする機会を頂きました。

そこで痛切に感じましたことは、人として最も大切な「人の道」、道徳、愛、をそれぞれの立場で確認し、実行しようとしておられる姿でした。表現の違い、ことばは違っても人間としての基本を、お互いに分かり合えたことは大きな喜びでした。

（この中国訪問については次号のIMAJニュースでより詳しくご報告致します。）

バザーのお礼とご報告

去る6月4日（日）に浦和で開催されました女性の会（関東地区）主催のバザーにつきましては、皆々様の深いご理解と温かいご協力により、無事成功の中に終わることが出来、厚くお礼申し上げます。特に浦和の皆様には、保育園ぐるみ、家族ぐるみで大変お世話になりまして、ありがとうございました。純益はご寄付と合わせて約20万円となり、早速、女性の会の会計に入れさせていただきましたが、皆様のご厚志を大切に、目的に沿って、有意義に使わせていただきます。誠に誠にありがとうございました。

今後共どうぞよろしくお願い申し上げます。

MRA女性の会代表
藤田　寿子
同バザー委員長
北口　泰子

事務局便り

◇20世紀も残すところ後数カ月となり、いよいよ新しい世紀を迎えます。新世紀の初年度には、先ず1月にインドで世界のMRAの女性たちのイニシアチブによる『平和の創造者』の会議が開かれます。また、第24回MRA小田原国際会議及びコー世界大会の日程もほぼ決まっています。できるだけ多くの皆様のご参加を願っております。

尚、詳細につきましてはMRA事務局にお問い合わせ下さい。

・『平和の創造者』会議　2001年1月12日（木）～20日（土）（於：インド、パンチガーニMRAセンター）
・第24回MRA小田原国際会議　2001年6月8日（金）～10日（日）
・第55回スイスコーMRA世界大会　総合テーマ "Globalising responsibility"（グローバル化する世界と我々の責任）
　2001年7月5日（木）～13日（金）　『責任を養い、リーダーシップを鼓舞する』
　2001年7月14日（土）～19日（木）　『コー産業人会議』
　2001年7月22日（日）～29日（日）　『21世紀のための目的と価値観を探る』
　2001年7月31日（火）～8月5日（日）　『和解への課題』
　2001年8月8日（水）～12日（日）　『互いの人生と信仰を分かち合うために』
　2001年8月14日（火）～19日（日）　『健全な治世のための課題』

◇現在、若い人たちが中心となって日本のMRAのホームページを開設するための準備が進みつつあります。より多くの特に若い世代にMRAの活動を知ってもらうのに大いに役立つことと思われます。完成次第、皆様に詳細をお知らせいたします。